



学校名: 松本秀峰中等教育学校

氏名: 續 美穂

[担当教科: 社会科]

● 実践教科等: 総合的な学習の時間

● 時間数 : 2時間

● 対象生徒 : 中学3年生

● 対象人数 : 41人×2クラス

1 単元名

ザンビアを通して世界の課題を考える

2 単元の目標

- ・ザンビアを知ることから他の世界の国や文化に興味を持ち、異文化理解の素養を身につける(つながりを尊重する態度)
- ・ザンビアに対する興味・関心を高め、人がいかに先入観に捉われているかに気付く(批判的に考える力)
- ・「自分は日本に生まれて良かった」という感想で終わらせず、先進国に生まれ育った私たちがすべきこと、やれることを話し合い発表する(進んで参加する態度・コミュニケーションを行う力・他者と協力する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・ザンビアの現状を把握することから、今、世界が抱えている問題について多面的に考察し、そのために何が必要かを考える【責任性】
- ・先進国が一方的に援助をするのではなく、先進国と開発途上国との相互依存の関係について理解する。【相互性】
- ・JICAの支援や国際協力について知り、地球規模の課題を共に解決していこうとする姿を知る【連携性】

4 単元の指導について

(1) 教材観

これまでの社会科の授業でザンビアについて触れたり取り上げたことはないので、生徒たちの予備知識はほとんどない。しかしアフリカ州については学んでいるので他のアフリカ諸国やいわゆる「発展途上国」のイメージは持っている。今回、「私が見てきた10日間のザンビア」として写真や動画、土産品などを使って見たまま・聞いたままを伝えるよう心がけた。もちろん10日間では見きれない他のザンビアの側面も当然あるので一方的なザンビア感の押し付けにならないよう配慮した。

(2) 生徒観

中学生ながらも、将来は医療分野や国連で社会貢献をしたいと願い勉学に励んでいる生徒もいる一方で、進路に悩みやりたいことを見つけられない生徒もいる。グローバル社会でリーダーとして活躍することが期待される中で、自ら進んで課題を見つけ解決しようとするような積極性や自発性をどう身につけていくかが課題ともいえる。「習ったことはできる、教わったことはできる」から未知なるものに遭遇した時に現状を客観的に判断し、どう工夫して発展させられるかを考えられる力を育みたい。

(3) 指導観

生徒たちは、頭では世界の南北格差や貧困問題を理解していても、どこか「遠い国の出来事」として自らと関連付けて考えることが難しい。援助や支援を一方的な強者と弱者の理論で捉えるのではなく、資源のない日本は世界の色々な国とつながり支えられ存在できているという当たり前のことに気付き、自分たちができることを考えさせたい。

自分の意見を発表することを苦手とする生徒もいるのでグループワークを取り入れ、自分も発信し仲

間の意見も聞き討論させることで他者を尊重し協力する力も培いたい。

私は生徒たちに「いつでもどこでも誰とでもやっていける力」を身に付けさせたいと常日頃から思っている。この国際理解や開発教育の授業を通して他者を理解し受け入れることの大切さやコミュニケーション能力、他者に発信する力など様々な生きる力を養うことができると考える。

5 評価基準

観点	ザンビアやそこで働く日本人への関心・意欲・態度	ザンビアや世界が抱える問題についての思考力・判断力	皆が望む世界にするために何が必要かを提案する知識・理解・技能	他者に対して自分の意見を述べる表現力・積極性・コミュニケーション能力
評価規準	意欲・関心を持って積極的に授業に参加している。	ザンビアや開発途上国が抱えている諸問題に気付くことができ、問題意識を持って考えることができる。	様々な情報や知識の中から適切なものを結び付けて考えることができ、他者に対してしっかり提案ができる。	グループワークの中で自分の意見を的確に伝え、他者の意見を受容し、建設的な討論ができる。
評価方法	観察・ワークシート	ワークシート・発言	ワークシート・発言・アンケート	グループワークの様子・発言・観察

6 単元の構成

時限	小单元名	学習のねらい	授業内容
1	・ザンビアを知る →国際理解 ・国際協力とは	・ザンビアに興味・関心を持つ ・アフリカに対する先入観に気付く ・国際協力の実態を知る。 ・ザンビアで働く日本人の思いを知り、キャリア教育の一助とする。	・アフリカ州が真中に位置する、現地で購入してきた地図を使って場所を確認し、関心を高める。 ・現地で撮影した写真・動画を使いザンビアの概要を知る。→アフリカの位置から生徒が連想するイメージ(紛争・飢餓・貧困)と写真のイメージが一致するか、しないのなら何が驚いたのかを話し合う。 ・青年海外協力隊・シニアボランティアの方のインタビュー内容を伝え、職業観やザンビアでの苦労ややりがいを知る。
2	・ザンビアを通して世界の課題を考える	・開発途上国が抱える問題に対して、自分は何が出来るかを考えさせる。→結果的に「中学生の自分には何もできない」という結論に至ったとしても、将来に向けて自分の力をどう世の中に役立させていくのかを真剣に考える。	・未来の世界に残したいものとなくしたいものを考える。 ・なくしたいと思ったものをなくすために、(皆が望む世界になるために)何が必要かを考える。自分に何が出来るかも考える。

7 授業事例の紹介

小单元名【 ザンビアを通して世界の課題を考える 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月6日(金)第6限

(イ)実施会場 3-2 教室

(ウ)本時の目標

・グローバル社会の一員として、他人事ではなく、地球の未来や平和、安全、環境保全などを真剣

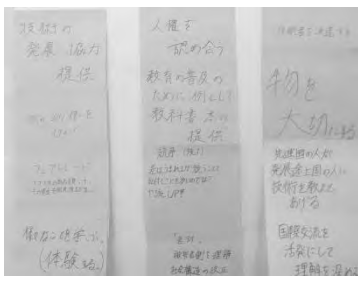
に考え、貢献しようとする態度を育てる。やや難しいテーマだが「自分には関係ない」と思わずに、世界の課題について真正面から向き合い解決の糸口を探す。

(エ) 指導のポイント

- ・開発途上国が抱える問題の具体例としてザンビアの衛生状態、教育問題、格差等を提示し、そこから世界の課題を考えてみる。
- ・グローバルイシューについて説明し、自分のこととして捉えられるようにアドバイスをする。
- ・資源のない日本が豊かな生活を享受できているのは、沢山の国に支えられているからである。生徒たちにとって支援や援助は持てる国が持たざる国に一方的に「してあげている」イメージがあるが、豊かな国に生まれた者として、日本を支えてくれたり日本と関わっている国に何ができるのか、世界の課題を解決する為に何をすべきなのかを『能動的に』考えさせたい。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	前時の振り返り	前時の感想(疑問や気付き)をまとめクラス全体で共通理解する。	一斉指導	開発途上国の現状を知ると必ず出る感想が「日本人で良かった」 ↓ 素直な感想であり、自分たちがいかに恵まれているのかを知り、感謝する心は大切だが、「日本に生まれてラッキー」で終わらせていいのかを問う。私たちに出来ることはないの?と発問。	
展開 10分	20年後に残したいもの・なくなしてほしいものの	4～5人のグループを作り、20年後の未来に残したいものと、なくなしてほしいものを話し合い、箇条書きで書きださせる。 	グループワーク	自由な発想でとにかく思いつくものを書きださせる。話し合いが停滞したり沈黙になってしまったグループにはヒントを出す	協力して話し合いに参加しているか。違った角度からも意見が出ているか。
10分		各グループがなくなしたいもので挙げた項目を紹介 ↓ これをグローバルイシューという。地球規模の課題のことで地球に住む我々皆が真剣に取り組まねばならないことを知る。 ↓ 国連の掲げるミレニアム開発目標(MDGs)を紹介し、生徒たちがなくなしたいと思ったものと一致することに気付かせる。MDGsの後継である「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にも触れる。	一斉指導	グローバルイシューやミレニアム開発目標など言葉が難しいので、とっつきづらくならないよう留意する。 生徒たちがなくなしたいと思ったものは実は大人も本気でなくなしたいと考えていて、その実現のために国連やJICAが活動していることと結びつける。	

15分	皆が望む未来の地球のために、今私たちができること	各グループが出してくれたなくしたいもの(紛争・貧困・難病など)が20年後に本当になくなるためには、何が必要かを提案する。今、自分たちに何ができるかを真剣に考える。 1グループにつき2枚、ポストイットに提案事項を書きホワイトボードに貼る。 	グループワーク	節約をする・寄付をする以外を考えてほしい。 『持続可能』というキーワードを挙げ、「1回寄付して終わりではなく、ずっと続けられる支援活動、もしくは問題解決の方法を考えて下さい」と促す。 ↓ 中学3年生には難しいテーマなので話し合いが停滞するグループもあるが、それでも自分たちの頭で考えひねり出したものを提案するよう促す	グループ内で積極的に意見交換ができたか。 最終的にグループで2つ意見をまとめ皆に提案できたか。
まとめ 10分	各グループの提案のまとめ	ホワイトボードに貼りだした各グループの提案を紹介し共有化を図る。	一斉指導	それぞれの提案をわかりやすく補足説明する。しっかり考えられたことを1つ1つ褒めてゆく。 最後に教師が考える「15歳の君たちが今できること」を話す。 SATREPSの紹介	

(2) 授業の振り返り

- ・20年後に残したいものとなくしたいものを話し合わせた時、なくしたいものは教師が誘導せずとも、各班ともほぼ同じ内容が出た。(戦争・核・難病・貧困・飢餓・格差社会・差別・環境汚染・地雷・暴力・人身売買・麻薬・テロ・いじめなど) 中学生も大人と同じように上記のものをなくしたいと考えていることがわかった。
- ・最後のまとめで、今、みんなにできることは一生懸命勉強することだと伝えた。今、目の前の数学や理科、英語を一生懸命勉強することが基礎学力となり、未来の世界の課題を克服するプロジェクトに関わったり、国際貢献できるかもしれないのだと。JICAでは専門分野を持った様々な専門家が世界の国に派遣されて今日も国際貢献をしている。日本の技術力や教育水準がとても高く、世界で尊敬されていることを知り、生徒たちは誇らしい気持ちを持ったようだ。SATREPS(地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム)のパンフレットを教室に置いたり興味のある生徒に貸し出しをした。地球温暖化や防災、エネルギー問題、感染症など多種多様な分野の最先端の研究チームが開発途上国と連携し、共同で世界の課題解決に取り組んでいることを紹介すると驚きとともに大きな刺激となったようだ。「中学3年生の今の自分には何もできないけれど、将来は誰かの役にたたい」「困っている人の助けになりたい」という感想が出た。今、勉強することは、未来の誰かの役にたつこと、何かの為になることだと伝えた。

(3) 使用教材

- ・現地で撮影した画像と動画(以下抜粋)

子どもの社会にも格差



スラム街でたくましく生きる子ども達



窓ガラスが割れた教室で



手作りのカレンダー



ザンビアのスーパー



ミレニアム開発目標(MDGs)とは

- ・目標1: 極度の貧困と飢餓の撲滅
- ・目標2: 初等教育の完全普及の達成
- ・目標3: ジェンダーの平等推進と女性の地位向上
- ・目標4: 乳幼児死亡率の削減
- ・目標5: 妊産婦の健康の改善
- ・目標6: HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延の防止
- ・目標7: 環境の持続可能性の確保
- ・目標8: 開発のためのグローバルなパートナーシップの推進

(4)参考資料等

- ・『わたしたちの地球と未来 ザンビア共和国』 愛知県国際交流協会(2009 年)
- ・SATREPS 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム
- ・外務省 ODA(政府開発援助) <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/>
- ・持続可能な開発のための 2030 アジェンダ
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/doukou/page23_000779.html
- ・国連ミレニアム開発目標報告 2015
<http://www.unic.or.jp/files/e530aa2b8e54dca3f48fd84004cf8297.pdf>
(いずれも 2015 年 11 月 2 日アクセス)

8 単元をととした生徒の反応/変化

- ・実際に自分の目で見ることの大切さを感じた。自分の先入観で物事を捉えるのではなく、実際に確かめることで今よりもっと視野を広げられるのだと思う。(私はアフリカは貧しくて、戦争が絶えない国だと思っていたので、先生の話聞いて、50 年間 1 度も内戦がなく平和で穏やかな国があることに驚いた。シマや先生のごちそう写真にもびっくりした。アフリカにも美味しそうなものが沢山あった！)
- ・日本みたいに皆が豊かに暮らせているわけではないが、写真を見ていると貧しい子どもも笑顔だった。そう考えると貧しいから幸せな生活を送れないわけではないことが分かった。ザンビアの子どもの勉強に対する意欲はすごいと思った。私たちは勉強するのが当たり前で感謝することなく過ごしているが、本当はとても恵まれていることを実感した。私もちゃんと頑張って、発展途上国で活躍しているジャイカの人たちのように、外国で人の命を救う仕事がしたい。
- ・「物がなければ工夫して作ろう」「できないならできるようにしよう」という先生の言葉が私の胸に残っています。ザンビアの人たちが黒板や移動実験台を自分たちで作っていることに驚きました。教科書をスーパーのチラシでラッピングしたりカレンダーを手作りしている写真にもびっくりしました。新しくきれいなものに溢れて生活している私たちには全く想像できませんでした。「日本人でよかったで終わっているの？」と先生はおっしゃいましたが、正直今の自分に何ができるんだろうって、考えても分かりません。でも私たちが恵まれているのは事実です。だから今度は他の国の誰かが幸せになれるために私には何が出来るのか少しずつ考えたいです。
- ・私は将来国連で働きたいと思っていますが、国連で働くことだけが国際協力ではないということに気付かされました。いろんな国際協力の方法があるんだなあと思いました。いろいろな職業に目を向けていきたいです。
- ・私はやりたいことが沢山ありますが理由をつけてできないと思っていました。でも何でもやってみることが大切だと思いました。私はザンビアに行って直接手伝えることはできないけれど、日本で何か1つでも人の為にすることができたなら、波のように優しさや幸せが広がっていきけるかなと思いました。
- ・私はザンビアという国について名前しか知らなかったし、アフリカの貧困国だと決めつけていたが、ただの貧しくて可哀そうな国ではないと知った。一番印象に残ったのは、そこに住む子ども達だ。私たちより苦しい生活をしているのに、私たちを超えるようなやる気を持って努力している。将来を具体的に考え、勉強している。ところで、今までにこのような内容のテレビ番組を見たことはあったが、特に何も思わなかった。ところが、先生という身近な人が自らの体験として紹介してくださったことで自然と色々なことを考えさせられた。次回授業も楽しみにしている。
- ・ザンビアのセカンダリースクールの子供達達が「一番幸せな時は」という質問に「試験に合格した時」というのを聞いてとても驚きました。私が同じことを聞かれても勉強に関することは1つも無いからです。ザンビアの人たちはすごいなあと思うのですが、心のどこかで「私には関係ない」「私にはどうにもでき

ない」と思ってしまいます。そんな思いが変化すればいいと思いました。

- ・「知ること」の大切さを知りました。たった 50 円のバス代が払えずに病院に行けず、本当だったら助かるかもしれない命が失われていくなんて私には信じられない、想像もできないことが現実になっていることを知りました。一方で日本と同じかそれ以上に高いスーパーやレストランに行くことのできるお金持ちもいて、この格差が悲しいです。格差をなくすためには何をすればいいのでしょうか。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【成果】

- ・生徒の中にはザンビアという国名さえも知らない生徒もいたが、授業を通して興味関心が高まり、以前よりアフリカを身近に感じ、偏っていたアフリカのイメージが変化したようである。教師自身が実際に見て、聞いて、感じて体験したことを語る授業は、生徒にとってもリアリティがあり今までの先入観をふきとばすインパクトがある。ものごとを先入観をとっ払い、あるがままに、様々な角度から見る体験の一助となれたようである。
- ・教科書やメディアを通してではなく、生徒たちにとって身近な教員が国際協力や支援の場を見てきて語った内容（病院やHIVのこと、学校や貧困、格差について）は、国際協力がどこか遠い国の出来事ではなく、日本が世界とつながり関わっていることをより実感として感じさせることができた。
- ・生徒たちは、「皆が望む未来のために今何が自分にできるのか」を真剣に考えた。大人でも非常に難しいテーマであるが、グループでそれぞれ自分の意見を出し合い討論することで、他人事ではなく自分の関わる世界のこととして捉えることができた。

【課題】

- ・伝えたいことが多すぎて、かなりあれもこれも詰め込んだ盛りだくさんな授業内容になってしまった。伝えるべき内容の優先順位をつけ、カットする勇気も必要だった。
- ・国際理解教育は教科に明確に位置づけされていないので、本校の年間授業計画との関係や授業時間数の確保が難しかった。

【改善策】

- ・今回、中学3年生の総合の学習の時間での実践となったが、実は他の学年の生徒たちからもザンビアの話を知りたいと言われ、中学2年、高校1年、2年、3年の授業では社会科の授業の一環として話をした。地理や歴史だけでなく、基本的人権の問題や南北問題、国際理解や国際協力、キャリア教育と様々な切りとり方で授業が行えようとする。発達段階に応じての内容をよく吟味して来年度からも続けていきたい。

10 教師海外研修に参加して

今回、日本から遠く離れ、開発途上国のために、未来が少しでも良くなるために、一生懸命働いている沢山の人々に出会えたことは大きな喜びであり、私の財産となった。まさにこの研修に応募しなければ絶対に会えなかった方々にお話を聞くことができ貴重な経験となった。ザンビアと日本のつながりや人と人とのつながりを強く考えさせられた。また、同じ体験をしても違った角度や視点で話し合える仲間との10日間は本当に充実しており、自分一人では気付けない様々なことに気付くことができた。

日本と比べて圧倒的にものが不足する中で、ザンビアの人たちの「ないなら作ろう」「できないことをできるようにしよう」という向上心や心意気にとても感動した。置かれた状況が不利だったり不便だったとしても、工夫する心や向上心を持つことの大切さを生徒たちに改めて伝えたい。

日本がザンビアの人たちから感謝され、信頼されていることに日本人として誇らしい気持ちになった。物資や金銭の援助だけでなく、技術移転や人材交流に力を入れ、現地の人たちに向き合い数十年後の先まで見据えての支援活動に感銘を受けた。国際協力や支援の基本はやはり「人」であり、この「人」を育てることこそ私にできる国際協力の第一歩なのかなと思う。資源のない日本が世界に誇れるのは確かな技術力と優秀な人材であり、将来、世界から必要とされる人材を育成することが私にできるさやかな国際貢献と捉え、これからも教育活動を行っていきたい。格差の是正や貧困の撲滅など、世界の課題は山積していて「どうすればいいのか」「何ができるのか」といった正解のない問いに真正面から向き合い、子どもたちと一緒に考え続けていきたいと思う。